

〔様式1〕

令和3年度 北区立小学校学力向上を図るための全体計画

令和3年度「北区基礎・基本の定着度調査」を受けての各教科の分析	
国語	学校全体の正答率を見ると、全ての学年が全国値の平均を同等かそれを上回っているが、昨年度の校内の平均正答率を大幅に下回っている。観点別で見ると、「知識・技能」、「思考・判断・表現力」の観点では、全ての学年の平均正答率が同等かそれ以上なのに対し、「主体的な学習に取り組む態度」の平均正答率はどの学年も低い傾向にあった。昨年度はコロナ禍の影響で、以前の学習指導要領でいう「話す・聞く」の領域の単元はほとんどできない状況であった。また、話し合い活動にも制限があるため、国語科のようにコミュニケーションをとりながら問題解決することができず、児童の主体的な学習に課題がある。感染対策を講じながら、交流を深め深い学びを進めていき、単元の中で自己調整を図ることができ
社会	学校全体(5～6年)の正答率について、5年生では全国値を上回ったが、6年生においては、平均正答率が60%と下回った。5年生は学習内容を概ね理解できており、基礎的な知識の習得や資料を読み取る力も身に付いていると言える。6年生はコロナ禍の影響もあり、国土や産業などの社会的な事象について、見学や体験など実際に肌で感じる事が困難な状況であったことが、「知識・理解」の向上につながらず、観点別の正答率にも影響が出たと推察できる。身近な都道府県の地理や特産物など、資料を読み取りながら特徴を理解し、実際に見たり触ったりしながら「生き
算数	学校全体(2～6年)の正答率は全国平均をほぼ上回る結果となった。観点別で見ると「主体的に学習に取り組む態度」の項目において、すべての学年で目標値を超えているか同等であった。「知識・技能」の観点を見ると、どの学年も目標値よりも平均を超えていた。できた喜びによって児童は自信をもち、「主体的な学習に取り組む態度」の資質向上につながっていると考えられる。ただ、「思考・判断・表現」の観点を学年別に見てみると、3年生、6年生の平均正答率が目標値を下回っていた。量感や答えの見積もり、文章題を数直線で示すことなど、問題文を読んで数値をイメージすることが苦手な児童が多いことから、生活場面への置き換えや、複雑な数値から整数への変換、具体物を用いる等、児童の理解を図
理科	学校全体(4～6年)の正答率は、70%近くで全国値平均とほぼ同等だったが、6年生においては正答率が60%を下回っていた。カテゴリ別の項目を見ると観点の「主体的に学習に取り組む態度」は学年が上がるにつれて目標値から数値が遠ざかっている傾向が見られた。自然現象の仮説を立証するためには、実験を行うことがカギとなる。しかしコロナ禍によって一人一人が充実した実験をすることができず、師範実験が増えた。よって「なぜ」が生まれにくく、子供たちの意欲や関心が高まりづらかったと推察できる。感染対策を講じた上で、子供たち自らが実験を行う授業を展開していくことで、児童の理解の向上につなげていきたい。

本校の教育目標
<ul style="list-style-type: none"> ○よく考える子 ○体をきたえる子 ○思いやりのある子 ○最後までやりぬく子

本校が児童に育成したい力
<ul style="list-style-type: none"> ・生きて働く「知能・技能」を習得する力 ・未知の状況にも対応できる、思考、判断し、表現する力 ・学びを人生や社会に生かそうとする、学びに向かう力

学力向上にかかわる経営方針
<ul style="list-style-type: none"> ・北区基礎・基本の定着度調査等の結果を基にした個に応じた指導の充実 ・「できる」喜びが味わえる授業改善 ・GIGAスクール構想に基づく、ICT機器の活用 ・授業観察による指導・助言や校内研修等のOJTの推進(きたコンの扱い方を含む)

校内における学力向上推進体制
<p>学力向上に関する特別委員会(研究推進委員会、学力向上・少人数推進委員会、通知表委員会、特別支援教育委員会)、分掌(授業改善推進プラン、図書館、GPO研修会【GIGA構想に係わる研修会】)、放課後補充教室(学力フォローアップ教室)等を有機的に機能させ、児童の学力向上を図る。</p>

本校の授業改善に向けた視点				
指導内容・指導方法の工夫	教育課程編成上の工夫	校内における研究や研修の工夫	評価活動の工夫	家庭や地域社会との連携の工夫
<ul style="list-style-type: none"> ・課題解決型・探究型授業の実践 ・学習活動「振り返り」の充実 ・児童に「わかる」「できる」喜びを味わわせる授業づくり ・十分な教材研究によるねらいの明確化 ・児童が主体的に取り組む学習活動 ・授業のユニバーサルデザイン化 ・GIGAスクール構想に基づく、きたコンの積極的な活用 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業時間確保のための学校行事の見直し ・新学習指導要領解説及び小中一貫カリキュラムに沿った内容を、さらに独自に解説を加えた「要約集」の積極的な活用 ・次年度実施に向けた、生活科・総合的な学習を中心としたカリキュラムマネジメントの完成 ・放課後補充教室(フォローアップ教室)の充実 	<ul style="list-style-type: none"> ・ICTの活用を通して主体的に学ぶ児童の育成を目指した授業の実践 ・授業改善を図るための、教員同士の積極的な授業参観(ブロック会で事後検討) ・GPO(きたコン)の使用方法・授業での活用方法などを全職員で行う研修のサステナブルな計画の作成、及び実施 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童の実態に即した評価規準に基づいた観点別評価の実施 ・評価規準や評価方法の工夫・改善(きたコンを利用したポートフォリオ評価の活用) ・きたコンを活用した教科横断的な学習計画の作成 ・PDCAサイクルを意識した指導と評価の一体化 ・主体的に学習に取り組む態度の「自己調整」及び「粘り強さ」の具現化 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校ファミリーで情報交換 ・地域の教育力の活用 ・ホームページの充実と更新 ・学校便りの発行(月1回) ・80周年記念式典の準備、交流を通して学ぶ郷土愛・地域愛の育成 ・児童の姿を自身も保護者も感じる事ができるキャリアパスポートの活用

指導方法の課題分析と具体的な授業改善案 (6年)

	指導方法の課題分析	具体的な授業改善案	補充・発展指導計画
国語	内容別正答率を見ると、「ポスターを作る」や「文章を書く」の内容が区の平均を大きく下回っており、その正答率は5～6割程度となっている。よって、今後は作文構成能力を高めるために、授業の中で文章を書く機会を増やしていく必要がある。このことで、文章を書くことに抵抗をなくしていく。	物語文を読んだときに初発の感想を書いたり、説明文を読んだときに筆者の考えをまとめたりするなど、文章を書く活動を意識的に取り組んでいく。作文が苦手な児童に対しては型を用意するなど、指導の工夫を行う。また、作文だけでなく、話し合い活動等を積極的に取り入れることで、自分の意見や考えを表現する力を育成する。	読書の時間を充実させるために、意識的に読書活動を促す工夫を行ったり、読書する時間の確保を行ったりする。具体的には、国語に限らず、授業で行った内容に関係する本を教室に用意したり、課題が早く終わった児童には読書活動の時間を設けたりする。読書活動を行うことで、その作品に出てくる文章表現を少しずつ獲得し、自身の作文課題に生かせるようにする。
社会	内容別・観点別ともに全ての項目で区の平均を下回り、課題が残る結果となった。まずは基本的な社会科における知識や、資料や地図を読み取る技能を身に付けることが必要である。また、児童が関心をもって学習に取り組めるよう、資料集や動画教材を活用する。	単元や内容によって都道府県の場所や、その土地の特徴を確認するなど、復習する機会を繰り返し設ける。このことにより社会科における知識を少しずつ定着させていく。教科書等に掲載している資料からどのようなことが読み取れるか、数字の変化等に注目して考える活動を行う。	毎日の学習の中で、資料を活用し、手に入れた情報を基にまとめ、発表する時間を設けていく。また、資料を集めるために、タブレットや新聞を活用することができるように環境を整備するようにする。
算数	内容別・観点別・領域別のほとんどが、区の平均を下回る結果となった。まずは基礎的・基本的な力の定着を図る必要がある。また、実験・観察に時間をかけられなかった単元の習熟ができていないことが分かった。このため、実験・観察を主軸とした単元計画をする必要がある。	実験・観察単元では予め理科支援員の先生と打ち合わせを行い、実験器具の個数や予備実験の結果など、必要な情報を学年で共有する。児童が実験・観察の結果から考察をする時間を長くし、起きた現象について自分の考えをまとめる力を身に付けさせる。	主体的に学習に取り組む態度の数値が低いことから、導入や学習問題の設定で児童から出た疑問や予想を取り入れ、意欲を高めていく。また、ICT機器を活用し自分の考えを表現できるようにしていく。
理科	内容別・観点別・領域別のほとんどが、区の平均を下回る結果となった。まずは基礎的・基本的な力の定着を図る必要がある。また、実験・観察に時間をかけられなかった単元の習熟ができていないことが分かった。このため、実験・観察を主軸とした単元計画をする必要がある。	内容別・観点別・領域別のほとんどが、区の平均を下回る結果となった。まずは基礎的・基本的な力の定着を図る必要がある。また、実験・観察に時間をかけられなかった単元の習熟ができていないことが分かった。このため、実験・観察を主軸とした単元計画をする必要がある。	主体的に学習に取り組む態度の数値が低いことから、導入や学習問題の設定で児童から出た疑問や予想を取り入れ、意欲を高めていく。また、ICT機器を活用し自分の考えを表現できるようにしていく。